

素竹一言

六十四号より

同じ色草の仲間のバツタ飛ぶ

草と同じ色をしているバツタ。そのバツタは「草の仲間」なのでであろうと感じた作者。発想の面白さが一句となりました。

玉葱の伏して岳麓新たなり

玉葱は熟すと一斉に地上部分が倒れます。それが景に動きをもたらし、「岳麓新なり」と句になりました。大きな景色が見えて来ます。

牡丹の吐息と共に昏れにけり

武骨な男供と違って、花を愛するご婦人方には、その花の吐息さえ感じられるのでしょうか。牡丹の大きさ、見事さが描かれています。

暫くは鏡面の代田かな

田植の前の代田の静けさが描かれ、数日後の田植の忙しさを暗示させています。農作業を良くご存じの作者でしょうか。

竹林の風が舞ひ込む竹落葉

開け放してある玄関に入ってきた竹落葉。竹林の風が入ってきたのだと俳人の目。竹林に住まうたたたずまいが想像されます。

草の間に風を吹き入れ夏の蝶

風もなければ動きもなく、夏のじめじめした大気。そんな草草の隙間に、蝶は風を吹き入れていると見た作者。独特な感性か。

蜘蛛の子の散りても母の糸の中

小さい小さい蜘蛛の子の固まりが何かに驚き解けるととき、それでも張り巡らされた親蜘蛛の糸の中だと。「母」としたのが眼目。

以上

メール句会

六月分

末摘花 選

特選

五月闇手着かぬままの夜明けかな

みさほ

五月闇のなかに短夜を内臓され上手く詠まれています

普通選

一汗をかけば人間正直に

公德

亡き兄の声不意にする梅雨晴間

美伊

誠哉 選

特選

配車する手続重し梅雨曇

美伊

多くの年配者の嘆きが伝わってきます。身につまされました。転ばぬ先の杖。

普通選

蜥蜴の目清く正しく美しく

公德

庫裏軒に七人家族のツバメの子

かきむすめ

小町選

尺取の弄ばれて怒りけり

公德

動きに愛嬌がある尺取虫。小さな虫の感情の様子がよくあらわれています。

普通選

裏腹な世辞も聞いている花菖蒲
一汗をかけば人間正直に

美伊 公德

空蟬選

結局は何も出来ずにゐる暑さ

みさほ

あの大震災から節電が叫ばれていますが、梅雨半ばでこの暑さ・・・

これからの思いやられます。

普通選

尺取の弄ばれて怒りけり

公德

急かされて土均しをる芒種の日

かきむすめ

東原選

特選

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方

小町

柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。

普通選

求愛の答えは無言牛蛙

小町

勇を鼓し薄着となりし衣替え

誠哉

かきむすめ選

結局は何も出来ずにゐる暑さ

みさほ

結局は何もできなかった：日常茶飯事のことを簡潔に素直に表現されたことに共鳴しました。

草笛が居場所知らせてをりにけり

空蟬

軽鳧の子のつぎつぎ堰を流れ下り

未摘花

公德選

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方

小町

満足な蚊は何処かに潜んで柔肌を眺めているのでは。

普通選

求愛の答えは無言牛蛙

小町

結局は何も出来ずにゐる暑さ

みさほ

愛選

庫裏軒に七人家族つばめの子

かきむすめ

庫裏の軒賑やかでしょうね。様子が目に見える

特選

庫裏の軒賑やかでしょうね。様子が目に見える

様です。

普通選

草笛が居場所知らせてをりにけり
一汗をかけば人間正直に

のどか選

特選

露涼し座禅に籠る二少年

普通選

裏腹な世辞も聞いている花菖蒲

草笛が居場所知らせてをりにけり

美伊選

特選

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方

暑い血の流れを感じました。良い句だと思いま

普通選

海風にのせる島歌沖繩忌

消えそうで振り返りみる月見草

みさほ選

特選

海風にのせる島歌沖繩忌

戦争の傷跡が生々しく残る沖繩の復興から日本

に返還された歴史は忘れることは出来ない。

普通選

梅雨の入り城の礎湿りをり

求愛の答えは無言牛蛙

伊藤 涼志選

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

七月九日

空蟬

公徳

空蟬

美伊

空蟬

小町

小町

かきむすめ

空蟬

かきむすめ

かきむすめ

東原

小町

以上

夏草や踏み込む一步拒みたり

蜻蛉生れ初飛行する水の上

炎帝も己が力を計りかね

蜻蛉生れすぐに水辺の恵み受け

水の星乾きしすきま蟻地獄

蜻蛉生れ神祕の色の世界持つ

蜻蛉生れ抜け出す殻の泥だらけ

夏草ややごの抜け殻柔らかし

川蜻蛉笹に止まりてストレッツ

草いきれ土の悲鳴の溢れいで

十葉や木下に集ひ風を呼ぶ

知りながら近づいてみる蟻地獄

青田風どこか音符のあるやうな

炎帝に晒す二の腕太々と

蟻地獄気長な時を満喫す

踏ん張った六肢放たれ蜻蛉生る

梅雨明けの空の明るさ足元に

木下 薫選

特選

世の汚れ届かぬ水辺蜻蛉生れ

普通選

地中より溢れ明るき山清水

蟻地獄気長な時を満喫す

炎帝も己が力を計りかね

休みなく扇動いて風となる

抜け殻に少し温もり蜻蛉生れ

落ちてまた這ひずり上がる毛虫の気

梅雨明けの空の明るさ足元に

炎帝に晒す二の腕太々と

蜻蛉生れ抜け出す殻の泥だらけ

飯島加津枝選

特選

世の汚れ届かぬ水辺蜻蛉生れ

普通選

炎帝も己が力を計りかね

なめくぢの沈思に森の息を止め

旅立ちの羽根柔らかくとんぼ生れ

ぬけ殻に少し温もり蜻蛉生れ

草いきれ土の悲鳴の溢れいで

蜻蛉生れ小さき花に呼ばれをり

志 帆

よし子

洋治

和子

満義

加津枝

薫

カウ子

カウ子

加津枝

和子

よし子

洋治

良美

和子

満義

志帆

良美

洋治

涼志

加津枝

志帆

満義

カウ子

志帆

志帆

志帆

洋治

満義

カウ子

涼志

涼志

満義

加津枝

和子

良美

洋治

涼志

満義

カウ子

志帆

よし子

涼志

涼志

舟山カウ子選

特選

青田風どこか音符のあるやうな

普通選

新しき風の生まるる古扇

蜻蛉生れやは風化を余儀なくす

人の世と別の匂ひや木下閣

蟻地獄気長な時を満喫す

蟻地獄期待はせぬと平常心

世の汚れ届かぬ水辺蜻蛉生れ

新井 良美選

特選

水の星乾きしすき間蟻地獄

普通選

涼風の呼ぶあてのなき小道かな

新しき風の生まるる古扇

草いきれ土の悲鳴の溢れいで

草の原小さき灯ともす蛇莓

蜻蛉生れ透明な色背負ひたる

人の世と別の匂ひや木下閣

松本 和子選

特選

新しき風の生まるる古扇

普通選

青深く目は新しきとんぼ生れ

棲むものに懐広げ草茂る

人の世と別の匂ひや木下閣

世の汚れ届かぬ水辺蜻蛉生れ

水の星乾きしすき間蟻地獄

蟻地獄期待はせぬと平常心

小田 満義選

特選

踏ん張った六肢放たれ蜻蛉生る

普通選

蜻蛉生れやは風化を余儀なくす

水の星乾きしすき間蟻地獄

なめくぢの沈思に森の息を止め

蜻蛉生れ自在に引きし流線美

青田風どこか音符のあるやうな

夏草や踏み込む一步拒みたり

和子

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

和子

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志